

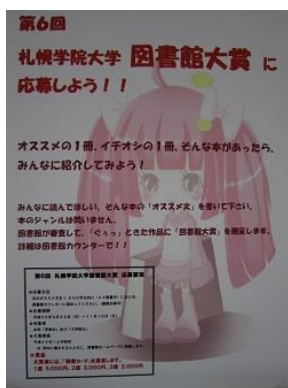
# 書林

第 86 号

2014 年 10 月 1 日 発行

図書館大賞に応募しよう	1
・受賞者インタビュー	2
・受賞作品紹介	3
私の薦めるこの1冊	4～6
自著紹介	7～8
from Library	9
Welcome to SGU Library	10～11
編集後記	12

## 「図書館大賞」に応募しよう！



毎年「みんなに紹介したいオススメ本やイチオシ本の紹介文」を募集し、心に「ぐうっ」とくる作品を書いた方に図書カードを進呈しています。

この「図書館大賞」は、日頃から本に慣れ親しんでもらうこと、読書意欲や思考力・表現力の涵養を目的としています。

オススメの1冊、イチオシの1冊・・・、そんな図書がありましたら、是非、皆さんに紹介してあげてください。本のジャンルは問いません。

みなさんの多数のご応募、お待ちしております！！

## ~~~~~ 第6回「図書館大賞」応募要領 ~~~~~

### ●応募方法

図書の推薦文を、1,500字以内に（A4横書き）にまとめていただき、図書館カウンターに提出してください。

### ●応募期間

9月22日（月）～11月10日（月）〔50日間〕

### ●対象者

学部生・大学院生

### ●大賞発表

12月初旬に図書館で選考し発表します。  
発表は学内に掲示するとともに、図書館ホームページに掲載します。

### ●大賞者景品

図書カード〔1席：5,000円・2席：3,000円・3席：2,000円〕

### 応募希望者必見

前回1席入賞者へのインタビュー・受賞作品をチェック！

[Next Page ⇒](#)

## 「図書館大賞」1席受賞者へのインタビュー

のじま はづき

野島 葉月 さん（人文学部 人間科学科4年）



### 「本を推薦することで もう一度その本の良さや魅力を感じることができる」

第5回「図書館大賞」〔2013（平成25）年度〕において、1席入賞を果たした、野島葉月さん〔人文学部人間科学科4年（受賞当時は3年生）〕に、当時の感想などのお話をお伺い致しました。

#### — 応募いただいた動機は何ですか。

今回、私が「図書館大賞」に応募したのは、図書館の職員の方に「こういうのがあるよ」と紹介して頂いたのがきっかけでした。

実は申し訳なかったのですが、声を掛けていただくまで、全く「図書館大賞」の存在を知りませんでした。今、考えると、卒業前にチャレンジすることができて、良かったと思っています。

#### — 執筆にあたって苦勞したこと、たとえば本を他の方に薦めるとい意味で、本の選定や文書表現など、特に意識したところがあれば教えてください。

本の選定に関しては、完全に自分の趣味でした。たまたま図書館大賞に応募する時期に読んでいて、衝撃を受けた本をそのまま推薦しました。内容はノンフィクションであり、表紙やタイトルも独特なので、内容を全く知らずに手に取る人は多くはないかもしれないと思ったのです。

そこで、なるべく本の核心や結末に触れずに、「どうなるんだろう」と興味を持てるように、且つ本の魅力が伝わるように推敲し、工夫しました。

#### — 「図書館大賞」に応募したことで、何か自分の中で感じたことや変化したことはありますか。

日頃から読書が好きで、本は多く読んでいる方だと自分自身思っていますが、読んだ本を別の誰かに薦めるということは初めてで、原稿を書いている時は少し緊張しました。ですが、執筆してみて、読んだ本を推薦するというのは、読んだ自分も、もう一度、その本の良かった点や魅力を感じることができて、とても楽しいと思いました。新しい視点での読書をするのができたと感じています。日頃の読書でも、この視点を大切にしたいと思いました。

#### — 日頃から本を読むことが好きとのことですが、野島さんにとっての「本」とは何ですか。

本は自分の知らない世界や体験できないことに触れることができるツールです。魔法が使える世界を感じたり、実際にはいない生き物に出会える、時には会ったことがない人の人生を知ることだってできます。

これってすごいことだと思いませんか？

人生、何十年あったって、様々な制限や現実の中でできないことは多々あります。でも、やってみたい、行ってみたいところは際限なくあります。それを手軽に実現できるのが本であって、私にとって本は、なくてはならない存在、人生の楽しみの幅や視野も広げることができる素敵な存在です。

#### — 4年生で色々とお忙しい学年かと思いますが、今年も、是非チャレンジをお待ちしています！ チャレンジされる場合の、意気込みをお聞かせください。

是非、今回も「図書館大賞」にチャレンジしてみたいと思います！

大好きな本を自分だけでこっそり楽しむのも悪くはないかもしれませんが、この本のここが好きだ、ここが面白いんだ、と力説するのもとても楽しいですね。これからもたくさん本を読んで、その魅力を誰かに少しでも伝えられたらと思います。

#### — 3年生になって「図書館大賞」の企画を知ったとのこと、声をお掛けして本当に良かったです。 今回のチャレンジで、是非、2連覇を狙ってくださいね。 ご協力ありがとうございました。

## 『毒婦～木嶋佳苗 100 日裁判傍聴記』

北原みのり 著

〔朝日新聞出版 2012年〕



## ＜推薦者＞

野島 葉月（人文学部人間科学科3年）

※ 上記は受賞当時の学年（現在4年生）

2009年秋。テレビ・新聞・雑誌など各メディアを賑わせたこの事件を覚えている人はどのくらいいるのだろうか。「木嶋佳苗」という名前を聞き、この事件のことを思い出せる人は何人いるのだろうか。覚えている人もそうでない人も、ぜひこの本を手にとってほしい。

「なぜこの女が、何人もの男性をだまし1億以上の大金を貢がせることができたのか」…木嶋佳苗の写真とともに事件が報道されたとき、そう感じたのは1人や2人ではないはずだ。現に、決して美しいとは言えないであろうその容姿、そしてそこから想像もつかないような事件の概要を各マスコミはセンセーショナルに取り上げた。

しかし、数か月もたつと、メディアが取り上げる事件はすっかり入れ替わる。どこのチャンネルを回してもその事件が取り上げられていたというほどのニュースも、あっという間に影をひそめ、次から次へと新しいニュースへと世間の注目は移っていく。報道というのはナマモノだ。事件がどのように進展し、どのような結末を迎えたのか。いつ、どのようにして裁判は行われたのか。メディアを通して顛末を知ることには決して多くはない。

この本は、タイトル通り「木嶋佳苗の100日裁判の傍聴記」である。著者は、木嶋佳苗という人間を知りたいと強く願い、裁判傍聴に通い続ける。そしてさらに、出生、家族、幼少期と、生まれ育った地を実際に訪れ、被害者男性のもとを訪れ、どのようにして彼女が生きてきたのか足跡をたどる。なぜ著者はそのような行動をとったのか。なぜ裁判の傍聴だけにとどまらず、より深く木嶋佳苗のことを知ろうとしたのか。その答えは、この本を読み終わったときにいやというほどにわかるだろう。現に私は、本を読み進めるにつれ、著者と同じ感情を抱いた。そして同時に、報道で知ることのできる事件に関する情報はほんの1部もしくはそれ以下であり、それぞれの事件は私たちの目に触れることがなくなってもなお、様々な人間関係、関わった人たちの思いを交えながら存在し続けているということを実感した。自分が送っている生活の中では決して目にすることのない世界を目にしたという思いが、この本を読み終わった後には強烈に残ることだろう。また、マスコミが注目を集めるために時にはドラマチック、ときには面白おかしく、そして大々的に報道する事件の裏には、その事件が影をひそめてもなお現代に浸透し続ける深刻な問題が潜んでいるのかもしれない。そこへ直接目を向けない人々への問題提起が、木嶋佳苗の事件を通して伝えているのがこの本である。

『木嶋佳苗。深刻な毒婦を、この社会は生んだのだと思った。』

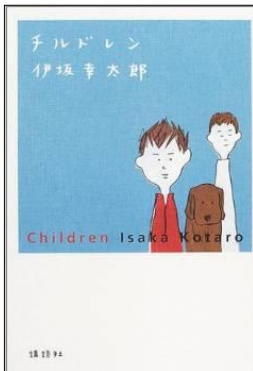
著者が本文の最後に綴ったこの一文の意味を、あなたがこの本を読み終わったときには理解することができるだろう。現代社会の闇を身近に感じ、自分に見えていることだけがすべての現実ではないということを実感する1冊である。

【 図書館所蔵 1層書架：和書 326.2/KIT 】

## ■ 私の薦めるこの1冊 ■

### 『チルドレン』 伊坂幸太郎 著

〔 講談社 2004年 〕



一條 遥香（ 人文学部 臨床心理学科 3年 ）

大人とはどのような人を指すのでしょうか。私は君子のような立派な、尊敬できる人を大人と呼ぶのだと思っていました。

この「チルドレン」に登場する陣内という男性は身勝手に騒々しく、周りを振り回すめちゃくちゃな人で、君子とはほど遠い人物です。しかし、彼には人を惹きつける魅力があります。彼の言葉や行動はしっちゃんめっちゃかなのに、陣内ならば大丈夫だと思えるような不思議な安心感があります。陣内は恰好よく生きている大人です。彼は立派な大人でもないし、良い大人でも、悪い大人

でもありません。立派な大人や良い大人がいないと世の中は大変なことになります。立派な良い大人だけでは少し息苦しくなってしまいます。作中に、「大人が恰好よければ、子供はぐれねえんだよ」という陣内の言葉があります。恰好いい大人がいることも、大切なことです。

一口に大人といっても、立派な良い大人だけが尊敬できる大人ではないのだと、この本から教えてもらいました。

【 図書館所蔵 1層書架：和書 913.6/ISA 〕

### 『蠅の王』〔新潮文庫〕 ウィリアム・ゴールディング 著 / 平井正穂 訳

〔 新潮社 1975年 〕

矢田理紗子（ 人文学部 こども発達学科 2年 ）



子どもだけでどうやって助かるか。この物語は未来の大戦中、疎開に行く子どもを乗せた飛行機が攻撃され、孤島に不時着したところから始まります。最初は、少年ラーフを中心に、烽火を上げて救助を待っていました。しかし、ラーフとジャックが対立してしまいます。そんな中、ついに蠅の王が姿を現したのです。本当の悪は裏切った仲間か、自分の心か。そして「真の救い」は訪れるのか。子どもたちの思考と行動から目が離せません。

この本を読んで、子どもの生きる力に驚きました。ただし、どの場面にも「子どもだけ」だから上手くいかないという葛藤があります。そんなことから、子どものありのままの姿が見られた気がしました。

そして忘れてはならないのが、この本が子どものサバイバルだけを描いた小説ではないことです。衝撃的なラストには、「その手があったか」という気持ちと「えっ、この後まさか…」という気持ちが入り混じりました。この結末が気になる方は、ぜひ自分の目で確かめてみてください。

【 図書館所蔵 2層書架：文庫 933/GOL 〕

## ■ 私の薦めるこの1冊 ■

### 『アフメーション：人生を変える！伝説のコーチの言葉と5つの法則』

ルー・タイス 著 / 田口未和 訳

[ フォレスト出版 2011年 ]



池田 和隆 ( 経済学部 経済学科 1年 )

皆さんはアフメーションという言葉を知っていますか？アフメーションという言葉は、持って生まれた潜在能力、思い描いている理想、望まれる結果を自分に信じ込ませ、効果的な目標設定を行うことを意味します。

この本では著者ルー・タイス自身の体験や失敗を交え、著書の中で読者に話しかけるように様々なアドバイスを与えてくれます。また、セルフトークを通して肯定的な言葉を自身に繰り返すことで自分の中の価値観や行動を変化させる手順を教えてください。これだけ聞くと何かまじないのようになってしまいかもしれませんが、自身のネガティブな思考をポジティブに変えることは自分の

人生を豊かにするうえで大いに役立つことだと思います。

約 400 ページという分厚い本で読破するのは大変だと思いますが、これだけのページ数でありながら書かれた内容全てに考えさせられる本であり、何度読み返しても新しい発見がある素晴らしい著書だと思います。興味が湧いた方がいたら、ぜひ一読してみてください。

【 図書館所蔵 1層書架：和書 159/T I C 】

### 『アベノミクスの終焉』

服部 茂幸 著

[ 岩波新書 2014年 ]



久保田義弘 ( 経済学部 教授 )

本書は、最近の経済政策について論評を書き下ろされたものです。その書き方は論争的であり、記述にも雑な面がありますが、最近の金融政策と財政政策の効果、あるいは在り方に批判的であります。代替案（経済政策）が提示されていないのが誠に残念であります。次の作品に期待します。門外漢の方にも分かりやすい書と思ひ、お薦めの一冊とします。

新書版の本書は、政策担当者を対象に書き綴っています。経済学を専門にしている同僚や本書の著者は、ポスト・ケインジアン派であり、新自由主義の経済政策には反対しています。

著者のアベノミクス（異次元の金融緩和と政策など）批判が的を射ているかどうかは、本書一読の後にご判断下さい。学生が本書を読む時には、積ん読ではなく、流し読みでもなく、拾い読みでもなく、精読される事を希望します。分からない用語についてはメモを取り、マクロ経済学のテキストを参照して、著者の論点を掴み、批判が的を射ているどうかを自身で判断下さい。

(参考：本書の著者は、ポスト・ケインジアン派であり、新自由主義の経済政策には反対している。本書で用いられている「トリクルダウン」という用語は、「富裕者の優遇によって経済を活性化されれば、富が貧困層にも「滴り落ちる」という考えです。)

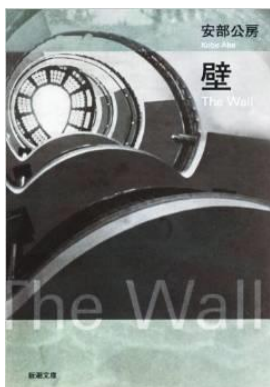
※ 現在、書棚にはありませんが、12月頃に配架(第4閲覧室)を予定しています。

## ■ 私の薦めるこの1冊 ■

### 『壁』 安部 公房 著

[ 新潮社 1969年 ]

水島 梨紗 ( 人文学部 講師 )



私がこの本に出会ったのは小学4年生の頃で、当時使っていた国語の参考書に、短編の1つである『魔法のチョーク』の冒頭部分が使われていたことがきっかけでした。物語の続きが知りたくて、さっそく書店に買いに行ったことを覚えています。

『壁』はオムニバス形式の小説で、第一部の『S・カルマ氏の犯罪』芥川賞の受賞作品です。第三部に収録されている『魔法のチョーク』を除き、同書の短編の多くは小学生の時分には少々難しい内容でしたが、年を重ねる過程で数えきれないほどこの本を読み返し、新たな気づきを得てきました。

今、私が『壁』という作品から感じるのは、「寄る辺を失った人間のもろさ」です。例えば、『S・カルマ氏の犯罪』の主人公は、ある日突然自分の「名前」を失ってしまうのですが、その途端にそれまでの彼の存在を守り、成り立たせていたあらゆるもの—自身の身体、家族や知人、住まいや所有物にいたるまで—との関係が揺らぎ始めます。ストーリーは異なりますが、『バベルの塔の狸』や『赤い繭』にも同様の「人の弱さ」が描かれています。皆さんも、それぞれの物語の不思議な世界を訪れ、主人公の感覚を味わってみてはいかがでしょうか。

【 図書館所蔵 C書庫 : 和書 918.68/ABE/2 】

### 『君たちに明日はない』 垣根 涼介 著

[ 新潮社 2005年 ]

常田万理子 [ 大学生協職員 (旅行サービス店長) ]



図書館でたまたま手にとって・・・、というのが、この本を読むきっかけでした。

その後、他のシリーズ作品 (第5弾まで) も次々に読みましたが、どれも面白く、はずれなしです。

リストラ請負会社に勤める主人公が、様々な業界のサラリーマンを希望退職に追い込む話術が実に鮮やかです。リストラというドロドロしたテーマにもかかわらず、登場人物も魅力的で、読後感は爽快。悩みぬいて答えを見つける人、ぶれない軸を持っていて即断する人、本当に色々な生き方があっていいと思えます。

様々な業界のリストラ候補者が登場するので、業界の裏側を覗き見る面白さもあります。会社とは何か。働くとは何か。これから社会に出る学生の皆さんにも、考えるきっかけとなる本です。是非、読んでみてください。

【 図書館所蔵 1層書架 : 和書 913.6/KAK/1 】

<シリーズ>

- |                           |                       |
|---------------------------|-----------------------|
| 君たちに明日はない (2) — 「借金取りの王子」 | 2層書架 : 文庫 913.6/KAK/2 |
| 君たちに明日はない (3) — 「張り込み姫」   | 2層書架 : 文庫 913.6/KAK/3 |
| 君たちに明日はない (4) — 「勝ち逃げの女王」 | 1層書架 : 和書 913.6/KAK/4 |
| 君たちに明日はない (5) — 「迷子の王様」   | 1層書架 : 和書 913.6/KAK/5 |

## 『財務諸表論の基礎』（八訂版）

渡辺 和夫 著

〔 税務経理協会 2013 年 〕



ここで紹介する『財務諸表論の基礎（八訂版）』は平成25年に刊行されたものであり、初版が出版されたのは平成7年のことである。税務経理協会の創立50周年を記念して「現代会計学の基礎」（全6巻）が企画され、その第3巻として出版されたものである。学部時代の恩師である新井清光先生が監修された。私の原稿に対して国際会計に関する記述が不足しているという指摘をいただいた。現在の状況と異なり、国際会計に対して関心をもつ研究者は一部にすぎなかった。

昭和49年から大学で教えるようになった。本書の初版が出版されるまでに22年の歳月が経過している。その間、教壇でいろいろな経験を重ねてきた。本書はテキストとして執筆されたものであり、そうした経験が生かされている。通常、4単位の講義科目には30回の講義が必要になる。全27章という構成は1回の講義を1章で完結させたいという考えにもとづいている。また、すべての章が3節から構成されている点も講義スタイルと関係している。私は講義の冒頭でその日のテーマと3つのサブタイトルを必ず掲げることになっているためである。

各章には「学習のポイント」と「練習問題」が付けられている。この形式は初版のときから継続している。内容については大幅に変更された。最近の会計基準は新設と改訂を絶えず繰り返している。国際会計基準と調和させるために、日本基準は頻繁に変更せざるを得なかった。会計基準がめまぐるしく変わることにより、テキストの内容を書き改める必要が生じた。しかし、出版社の事情も考慮しなければならない。在庫がなくなるまで改訂の機会はなかなか与えられなかった。本書を八訂版まで出せたことは幸運と考えなければならない。

大学院時代の恩師である染谷恭次郎先生は研究書を出す前にテキストを書くことを禁じていた。テキストの内容にはバランスが求められる。専門領域に特化した研究をしていると、そのバランスをとりにくいためであろう。また、テキストを書く時間があれば研究に専念すべきであるという意味かもしれない。

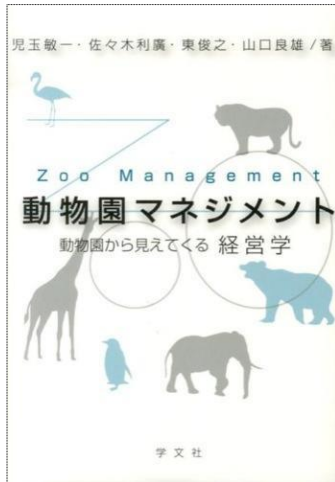
最後に、本書の内容は新井先生の『財務会計論』と染谷先生の『現代財務会計』に強く依存していることを付け加えておきたい。

【 図書館所蔵 本学教員著作コーナー（ラウンジ）：和書 336.92/WAT  
1 層書架：和書 336.92/WAT 〕

## 『動物園マネジメント』 — 動物園から見えてくる経営学 —

児玉 敏一（他） 著

〔学文社 2013年〕



本書は日本各地の動物園や水族館が取り組んできた改革の歩みを、マネジメントという視点から取り上げたものである。ここでは経営ビジョン、戦略、イノベーション、組織変革、ビジョナリー・リーダー、組織学習、モチベーション、組織間協働など、マネジメントに関わる用語や概念が多用されており、動物の愛くるしい写真などはほとんど掲載されていない。したがって動物愛好家にとっては落胆してしまうかもしれない。執筆にあたってはできる限り現場を視察し、関係者にもインタビューすることに心がけてきた。

本書の中でも述べたように、企業のみならずあらゆる組織体は変化する組織環境に適応し日々絶え間ないイノベーションを行い進化することなしには自らの組織の維持・発展を続けていくことが不可能である。こ

のことは動物園や水族館も例外ではありえない。

本書の前半部分では主に、動物園と水族館における展示方法や飼育員と動物たちの接し方など、如何にして動物園の魅力を高め、入園者たちに楽しんでもらうための工夫を行ってきたのかという動物園・水族館の組織学習・イノベーションの現状を取り上げている。後半部分では、動物園を外部から支えてきたNPO・NGOの視点からみた動物園の取り組み、そして地域力の源泉としての動物園の役割という、より広範な視点から紹介してきた。

本書が生まれた経緯は、イノベーション論を専門とする児玉と組織間コラボレーション論を専門とする佐々木氏との出会いから出発した。それまで円山動物園などのコラボレーション問題を研究してきた佐々木氏と、須崎市動物園などのイノベーション問題を研究してきた児玉が、動物園の経営問題の重要性を確認し、2007年に共同研究プロジェクトを発足した。その後共同研究者として参加したのがもう1人の共著者である東氏である。東氏は地域力の源泉としての動物園の役割についての研究を行ってきた新進気鋭の経営学者である。もう一人の共著者の山口氏は釧路市動物園の元園長である。山口氏は行政改革の波の中で厳しい状況に置かれていた釧路市動物園に2008年に赴任し、見事に釧路市動物園の改革を実行した方である。山口氏の試みと情熱に共感し、いわば強引に本書の執筆への参加を依頼したのが2012年の夏のことであった。本書でみてきた動物園・水族館の改革の歩みは、動物園や水族館の今後の発展に寄与するだけでなく、低成長・少子高齢化の進行によってともすれば内向きで閉鎖的になり、その将来像を描けないでいるあらゆる組織体やまちづくりの在り方にも大きな示唆を与えるのではないかと考えている。その意味では、これからマネジメントを学ぼうという学生諸君や、組織の管理職を目指す社会人の方々に読んで頂ければと願っている。なお、本書の第7章と第8章については、文部科学省科学研究費補助金・基盤（C）（課題番号：21530369）および基盤C（課題番号：21530429）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。本書の出版に際しては動物園・水族館の園長・館長や飼育員の方々、動物園・水族館協会や地元の市役所の方々、さらには施設づくりや動物園・水族館と協力を外部からさせてきたNPOや企業の方々など、さまざまな方々にも貴重なアドバイスをいただいている。本欄を借りて感謝申し上げたい。

【 図書館所蔵 本学教員著作コーナー（ラウンジ）：和書 480.7/KOD  
1層書架：和書 480.7/KOD 】



## 身の回りの自然と

六本木 英子（図書館職員）

窓に目をやると、陽を浴びたプラタナスの大きな葉が風に揺れています。こんもりと茂った街路樹は、窓に緑のカーテンを、舗道には木陰をつくっています。休日は公園や緑地に散歩に出かけますが、時間がない時は、家の周りやプラタナスの通りが散歩道になります。春から秋にかけては庭先や道端の花の美しさを、特に、夏は木々のあふれるような緑に生命の強さを感じながら歩きます。小さな公園にあるシダレヤナギは、舗道にまで枝を伸ばしています。細長くしなやかな枝がいく筋も風になびいているのを見ていると、肩の力が抜けていくようです。少し先を行くと、ツタが傾きかけた物置をそれとはわからない程に覆い、緑色のオブジェを造っています。秋にはどのような姿になるのかを思い描いてしまいます。名前のわからない庭木は、太い幹の半分以上が朽ちて、住む人のいない家に寄りかかっていますが、広げた枝いっぱいに薄緑色の糸より細い葉を付けて、光を浴びています。アカシヤ、ナナカマドのそばを歩いて、私の好きなポプラの木立まで歩きます。



街や公園を歩くと、たくさんの木に出会います。もう少し木のことを知りたくて、小さな入門図鑑『知りたい北海道の木 100』を持ち歩いています。それによると「ポプラはシダレヤナギの仲間。名前の由来は学名 *Populus*（人民）にちなむ。これは、かつて市民がこの木の下で集会をひらいたことから」とあります。観察場所も書いてあり、身の回りの自然に触れる時間が増えそうです。

時折、読み返す本があります。写真集『森の本』です。美しい写真と添えられた言葉は、自然の厳しさ豊かさを、そして生命のつながりについて静かに伝えてくれます。「しみこ

む：森の地面は、まるでスポンジのようにふかふか。多いところでは 80 パーセントもの隙間がある。地面に落ち葉がたくさん積もり、そこで雨を受止めてから、下の土に流す」「幸運な種：毎年たくさん実るミズナラのドングリのうち、大きな木になれるのは百万分の一以下だ」「シマリスの孤独：1 頭のシマリスが、冬眠する巣にたくわえるドングリなどの食料は 1.5 キログラムほど。体重の 16 倍にもなる。」ページをめくるたびに、鈍った感覚を少し取り戻せたような気持ちになります。この感覚を忘れないように、秋の散歩を楽しみます。

### ★ 参考図書

\* 『知りたい北海道の木 100：身近な街路樹・庭木・公園樹』 佐藤 孝夫 著 [ 亜璃西社 2014 年 ]

【 図書館所蔵 1 層書架：和書 653.2/SAT 】

\* 『森の本』 ネイチャー・プロ編集室 編 [ 角川書店 2001 年 ]

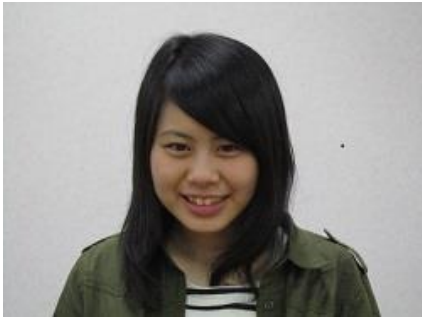
### ★ 推薦図書

\* 『森の力：育む、癒す、地域をつくる』 浜田久美子 著 [ 岩波書店 2008 年 ]

【 図書館所蔵 第 4 閲覧室：文庫 652/HAM 】

まきた さゆり  
**蒔田紗友里** さん（法学部法律学科2年）

## 「将来は資格を生かした専門職に就きたいです！」



毎日、早朝から来館し、爽やかな笑顔で元気に挨拶してくれる蒔田さん。図書館ではいつもの場所で、勉強している姿がとても印象的です。

今年の夏休みの過ごし方についてお聞きしたところ、資格取得に向けての勉強が中心だったとのこと。着実に将来に向けての準備が進んでいるようです。

そんな蒔田さんに、本学の法学部を希望した理由や、将来の目標などを、お伺いしました。

- ご出身とご卒業された高校を教えてください  
もし高校時代にクラブなどで活動をされていたら教えてください。

生まれも育ちも札幌市で、池上学院高等学校（札幌市豊平区）を卒業しました。高校時代は、絵を描くクラブに所属していましたが、ゆるい感じで行われていたので、出ないこともしばしばありました(笑)。

- 本学の法学部法律学科を選んだ理由と、将来に向けての目標をお聞かせください。

母が勧めてくれた学校が本学でした。昔から法学部はどの職種に就いても潰しが利くと言われていて、当時やりたいことがなかった私には、法学部が一番いいのではないかと、という結論に達しました。今考えると安易だったなと反省しています。しかし今は、自分なりにどういった自分になりたいのかが、色んな方々との出会いの中で少しずつ見えてきたので、なりたい自分になれるよう頑張っていきたいと思っています。具体的には、入学当初、職が安定しているからという安易な理由だけで公務員を目指していたのですが、今は公務員ではなくて、資格を生かした専門職に就きたいと考えています。

- 大学生活も2年目になり、色々とお忙しい日々を送られていることと思います。  
入学前に思い描いていた大学生活を送れていますか。

全く想像と違いました。いい意味で。入学時の提出書類に、クラスと担任の記入欄があって、結局大学は高校の延長線上で、クラスがきちんとあるんだ、教室が広くなっただけで高校とあまり変わらないかもしれないなんて呑気なことを考えていたのですが、実際は担任の先生がいても、高校の雰囲気とは全然違いますね、ただ授業をきいていけばいいのではなく、自分から授業に参加しなければならず、ああ、もう大学生なんだなあ〜っ・・・、と痛感しています。

- 大学（法学部）での授業はいかがですか。勉強されていて、難しいと感じているところはありますか。

難しいところをあげると切りが無いです。授業中は先生の話聞いてわかったつもりになっているのですが、復習したときに全然理解できていないなんてことはざらにあります。勉強方法なんかは、誰も教えてくれないので、それが一番厄介ですね。そういう時は、人と一緒に勉強するのがいい方法なんだってことに気がついたのがわりと最近です。

— ボランティア活動など、卒業を目的とした勉強以外、大学時代において他にやってみたいと思っていることはありますか。

バイトとボランティアのどちらかは絶対やっておきたいです。こういった経験がないと就活のときに大変だと聞きますし、社会がどうやって動いているのかを知るのにもやっておかなければならないなと感じています。卓上で勉強と、実際に勉強を生かして行動することとは、何かと違うと言いますので・・・。

— 本学図書館に関連する質問をさせていただきます。

— 毎日、図書館でお顔を见ている感じがするのですが、1週間の利用日数と1日の利用時間の状況を教えてください。

大学に来たときは必ず利用させていただいていますので、土曜・日曜以外は、ほぼ毎日です。1日の利用時間にばらつきがあってなんとも言えないのですが、短くて1時間半、長い時で、5時間くらいでしょうか。レポートの時など、本当にお世話になっております。

— 主な図書館の利用目的は何ですか。どんなことに役立っていると感じていますか。

毎日の講義の復習で利用させていただいています。あとは、この先資格を取るなどで役立つと思われる教科の自主学习です。家では何かと誘惑が多いので、図書館は、誘惑に負けないための場所という感じです。

— 蒔田さんにとって、図書館のお気に入りの場所 Best 3 を教えてください。



1番は、第一閲覧室1階の窓側の席ですね。考え事をしている時のポケットとした顔を人に見られずに済むので・・・。私が窓側の席にいる時は、なるべく見ないように、お願いします(笑)。

2番目は、視聴覚室のDVD鑑賞ブースですね、映画見るのが好きなので・・・。と言いつつあまり利用していないのは、感動系は号泣するからです。

3番目は、グループ学習室です。人とおしゃべりをしながら何かするのはやっぱり楽しいです。それに、図書館でワイワイしても怒られないなんて素晴らしいです。

— 積極的に図書館を利用されている蒔田さんにとって、他の学生さんに図書館活用法のアドバイスがあれば、お願い致します。

図書館は、どんな気分の時でも自分の居場所が確保できる場所だと思っています。

一人になりたい時には、1つ1つ机が置いてある場所もありますし、皆でワイワイ話でもしながら課題をやるなんて時にはグループ学習室があって、「勉強なんてやってられるか！」って思う時なんかは、視聴覚室のDVDを鑑賞できるブースがあるので、自分のその時の気分次第で図書館のスペースを有効活用するのがいいと思います。

— 最後に、本学図書館を利用している上で、感想や要望を含め、その印象をお聞かせください。

とても過ごしやすい場を提供してくださっていると来るたびに感じます。本のおすすめコーナーは参考になりますし、おそらく最近できたと思われる資格関連の本を置いてあるコーナーも、将来の自分がどういう職種に就くべきか、といった目安になるので、ありがたいです。蔵書の数も文句なしなのではないでしょうか。欲しい本があって、わざわざ町の本屋さんまで探しに行ってみたら見つからなかったのに、この図書館にありましたから。灯台下暗しでした。

— 突然のインタビューにもかかわらず、快くご対応いただき、ありがとうございました。図書館を大いにご利用いただき、これからも目標に向かって頑張ってください。

## 編集後記

---

今年の夏は、高温多雨といった印象が強かったですね。暑さもそうですが、各地で記録的な大雨にみまわれました。これも温暖化の影響による異常気象の一種なのでしょう。北海道はこれから厳しい冬を迎えますが、これ以上の異常気象による被害が発生しないことを祈るばかりです。そんな先の不安もありますが、その前に、食に、芸術に、スポーツに、そして読書に最適な秋を楽しまなければ・・・、と考える今日この頃です。皆さん、当『書林』掲載の「私の薦める1冊」を参考に、読書の秋をお楽しみください。



そして朗報を一つ。既にご案内はしておりましたが、学生さんが自由に利用できる図書館内のパソコンが一新され、Apple社製コンピュータのiMacが導入されています。〔第1閲覧室（車椅子利用者用）：1台、第4閲覧室：38台、グループ学習室：12台〕

最初の数日は、操作に戸惑う学生さんもいるようでしたが、今は積極的に使用し、使いこなしている様子です。時代の先端を行く水準の高いパソコンにより、思う存分、勉学に研究に勤しんでいただければと思います。

さて、多くの方々のご協力により『書林』第86号を発行することができました。ご多忙にもかかわらず、快く執筆やインタビューをお引き受けいただきました学生の皆さん、教員ならびに職員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

今回お届けした『書林』第86号の主な内容は、次のとおりです。ご感想・ご意見などがありましたら、図書館までお寄せください。

### ■図書館大賞に応募しよう

前回「1席」受賞者へのインタビューや作品紹介の特集です。今回の応募を考えている方は、必見です。

### ■私の薦めるこの1冊

本学の学生3名と教員2名にお願いしたものです。今回も心に響く作品を、ご推薦いただきました。興味のある著作については、是非、読んでみてください。

### ■自著紹介

経営学部教員が執筆された2冊の紹介です。講義で使用されていることもあり、「分かり易く」を意識されて執筆されています。是非、ご一読ください。

### ■from Library

図書館職員の、日常における心温まる自然とのふれあいが書かれています。

### ■Welcome to SGU Library

毎日図書館でお見かけする、法学部2年生へのインタビューです。将来、専門職に就くため、資格の勉強に取り組む姿勢や、図書館利用についての感想が述べられています。

~~~~~  
札幌学院大学図書館報「書林」第86号について

\*掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。

\*記事・写真の無断転載は禁止します。

\*紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾を頂いております。

許諾を下さいました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。  
~~~~~